

## 私の台湾文学研究クロニクル

山口 守

### 一、中国現代文学の道から——吳克剛との出会い

台湾文学概念の成立に様々な歴史的要因や政治的見解が関係していることは周知の通りだが、その歴史的、政治的複雑性により生成される多様性や多層性が、超域的な研究の場としての台湾文学研究を支えるという逆説的な状況があり、どの領域から台湾文学研究に入っても、既成の研究方法や理論では立ち行かなくなつて、新たな理論や視点や思考の枠組みを探索せざるを得なくなり、相乗効果のようにまたその研究の多様性、多層性が増大する。台湾文学はここ百年に限定すれば、日本の植民地統治の結果、文学言語が中国語（漢語）と日本語に大別されるため、日本において台湾文学研究を行う場合、日本語を母語とする者は戦前期台湾文学を研究するのに有利であり、中国語を習得した者は戦後台湾文学を研究するのに有利であるが、台湾文学を一つの全体として考えた場合、言語で研究領域を分けても生産的な研究には結びつかず、逆に複数の言語文化を理解することで超域的研究の出発点に立つて、研究の全体性が展望できるように思う。単に日本語や中国語能力があるだけでは台湾文学研究の十分条件とはなり得ないのである。近代日本の帝国としての歴史、植民地研究、アジアの近代化、ポスト・コロニアリズムなど多くの課題や問題の基礎学習に加え、それら

を見通しながら自分の視点や見解を構築できる新たな理論的枠組みや方法論が必要である。中国現代文学を専門とする私が、台湾文学の分野に足を踏み入れた時にまず直面したのはその問題であった。しかも私の場合、一九九八年五月、日本台湾学会創設記念シンポジウムで「越境する文学と言語」<sup>1</sup>と題する発表を行って、台湾文学研究と正面から向き合う決意をするまでにかなりの時間を必要とした。

一九八〇年代に台湾文学に関心を持つ者は、文学分野であれば、大別すると台湾文学、中国文学、日本文学の三つの入り口があったように思う。私の場合は中国文学から出発して台湾文学に関心を持つようになったが、契機は偶然と言つてよい。東京都立大学の学生だった当時、抗戦期中国文学に興味を持ち、巴金とアナーキズムを中心に勉強して、現在でもそれを専門にしているが、大学院進学後、当時まだ国費留学が不可能だったので、休学して一九七九年春から八一年春まで、上海の復旦大学外文系で日本語を教えながら、中文系で中国現代文学を学ぶ機会を得た（滞在後半年して日中両国が国費留学生の交換を開始）。当時は台湾文学に関する知識がほぼなく、高校時代に兄が購読していた竹内好主宰の雑誌『中国』に連載されていた呉濁流の『無花果』を読んで、台湾人が戦時中、大陸中国で日本語新聞の記者を務めた歴史があることを知った程度であった。その後、外文系で日本語教育の仕事をする過程で、呉濁流のように中国で日本語能力を使って生きる台湾人と出会うことになった。復旦大学日本語学科に二人の台湾人教師がいて、ほぼ完璧な日本語を話し、なおかつそのうちの一人は「さしすせそ」が「しやししゅしえしよ」に聞こえる、日本国内のある地域に多かったとされる発音の日本語を話す人物だった。当時はまだ外国人に対して警戒感があり、また台湾省籍という微妙な立場からか、二人に尋ねても故郷台湾のことを語ることはほぼなく、そのうちこちらも次第に事情を察して、聞いてはいけないこと、答えたくないことがあることが分かり、会話にも気を使うようになった。それに二人とも戦後初期台湾の国民党独裁政治に対する抵抗運動に参加して、大陸へ逃れてきた経歴があり、強い中華民族意識を持っていた、巴金やアナーキズムに関心のある私とは話が噛み合わないことも、会話の内容が深まらない理由の一つであった。

今思えば、二人の台湾人教師ともっと正面から向き合って交際していれば、中国で日本語能力の高い台湾人として生きることの意味や歴史をより深く知ることができたはずである。戦時中、周作人の紹介で北京大学で日本語・日本文学を教えていた張我軍のことを現在調べているので、その思いがひときわ強い。

やがて日本へ帰国して大学院へ戻ったが、その段階ではまだ台湾文学に強い関心はなかった。個人的には帝国日本の植民地統治の記憶が残る地に足を踏み入れることに感覚的な抵抗感や、倫理的な罪悪感があって、台湾や韓国へ行くことに躊躇いがあつたというのが正直なところである。それが偶然知り合つた台湾留学生と台湾独立問題を議論していた時、「見もしないであれこれ言うのはおかしい」と率直に批判されて、自分の目で台湾社会を見てみようと思つたのが、初めて台湾を訪問するきっかけとなつた。実は巴金研究の必要からも、いずれ台湾に行つて資料収集をする必要性を感じていたので、その留学生の言葉が後押しをしてくれた面もあつた。一九二七―二八年巴金がフランスに留学していた時、パリで同じ部屋に住んでいたアナーキスト呉克剛が、戦後台湾へ渡つたまま、大陸中国と連絡が途絶えて消息不明だったので、存命であればインタビューしなかったし、国防文学論戦で巴金と共に「中国文芸工作者宣言」を起草して、魯迅や胡風の側に立つた黎烈文や、開明書店の編集者で巴金と親しかつた索非も台湾へ渡っているのだ、その関連情報も収集しなかった。ただ一九八五年夏に初めて台湾を訪れた時、そうした作家・編集者に関して詳細な情報を持つているわけではなかった。例えば黎烈文に関しては、台湾へ渡つた作家の消息が人民共和國体制下で公表されることは珍しく、巴金が文革後に発表した「懷念烈文」<sup>(3)</sup>（『探索集一三（隨想錄四三）』）でも、黎烈文の台湾における生活については、当初新聞社に勤務して、後に台湾大学へ移つてフランス文学を講じていたこと、一九七二年一月に不遇のまま逝去したことなどが書かれているが、具体的な生活については詳細な情報がない。黎烈文の台湾大学におけるフランス文学研究者としての一面は、後に白先勇が『現代文学』創刊当時を振り返つた文章で「黎烈文教授が賞賛してくれたが、読んでくれる人がいるだけで私たちは嬉しかった」<sup>(4)</sup>と、当時の文学青年たちに対する五四作家としての影響力を窺い知る記

述を残していることを知ったが、戦後台湾で黎烈文のような、大陸時代すでに国民党政府に批判的な知識人への研究が進むはずはなく、八五年の段階では、以下に述べる呉克剛のように人を介した情報しか入手できなかった。「懷念烈文」で巴金は、一九四七年六月二〇日から七月二二日にかけて、黎烈文らに会うことを目的に台湾を訪れたことを回想している。巴金は黎烈文が副社長を務めていた『台湾新生報』に、四川のアナキスト盧劍波の著書『心字』の書評を発表したことがあり、これが台湾における巴金の唯一の発表作品である。同紙の別の記事「在台湾的作家」に抛れば、「光復後、最初に台湾へやって来た中国作家は黎烈文だろう」とあるが、その黎烈文も戦後台湾の政治状況の中で、自由に言論発表できる機会もなく世を去っていった。従って呉克剛のように一九二〇—四〇年代中国の記憶を留めたまま、戦後台湾で生きてきた知識人から話を聞く機会は実に得がたいことであつた。

一九八五年夏、初めて訪れた台北は、街角に銃を持ったMPの姿が目立ち、大陸中国とは違った緊張感を感じたが、一方で街中に溢れる繁体字の看板が、書物の中でしか知らない民国期の中国都市を思い起こさせ、奇妙な既視感を覚えた。台北は初めてだったので、もちろん友人・知人がいるはずもないが、東京で知り合った台湾留学生の紹介である大学教師と連絡が取れ、早速呉克剛の消息を探したい旨伝えた。その人は台湾大学中文系出身で、呉克剛に関する説明を聞くと、それなら恩師の台静農先生が知っているかもしれないからと早速電話して聞いてくれた。台静農先生はすぐに返事をくれて、呉克剛は中興大学経済系で教えていたから、大学の事務に電話すれば現住所が分かるだろうとのことだった。呉克剛が存命で、台湾在住であることを知って非常に嬉しかったが、それと同時に中国現代文学を学ぶ人間にとって「歴史的人物」である台静農先生が、私のような見も知らぬ外国人のために消息を調べてくれたことにとても感激した。やがて入手した住所と電話番号に基づいて呉克剛と連絡を取ると、国民党特務の監視が心配だから、夜になってから訪ねてきてほしいと言われた。上海時代にも同じように友人から、外国人と接触したことが公安に知られると大変だからと言われ、夜にしか家を訪ねることができなかったことを思い出したが、淡水の裏通りの薄暗い街灯しかない、

最後はその街灯すらない闇の中を、足元を探るように歩を進めながら辿り着いたアパートの一室で、呉克剛はにこやかに出迎えてくれた。それ以降、数年おきに台湾を訪れては呉克剛にインタビューして聞き書きを行い、自叙伝を書くことを勧めたが、彼は国民党特務を非常に恐れ、自分の生涯を世の人に知られるのを嫌がった。彼は国民党特務の恐ろしさを説明する時に、平気で人を殺す連中だからと実体験を話してくれたが、最初の例が許寿裳殺害だった。呉克剛は當時省立図書館長として編訳館長の許寿裳と仕事上では利害対立があったが、同じく温州街に住んでいたので、夜明け前に許寿裳殺害の知らせを聞いて彼の家へ駆けつけ、血の海の現場を目撃したのだった。この体験は呉克剛に沈黙と忍従の数十年間を強いるのに十分だったようである。

その後、呉克剛に会うたびに戦後台湾で生きていくことの苦悩を聞かされたが、彼は国民党軍事独裁政権を厳しく批判する一方、戦後国民党と共に渡台した外省人であっても、当時の所謂「党外運動」や台湾独立運動に極めて同情的であつた。すでに八十歳を超える老人だったが、戦後台湾政治を語る時に見せる自由と平等への強い情熱は、一九二〇年代アナキストの姿を髣髴とさせ、外省人・本省人という対立構造では読み解けない生き方があることを学ぶことができた。この点は、その数日後に会った胡秋原と対照的だった。台北南郊の中央新村に邸宅を構える胡秋原に面会させてくれたのも、呉克剛を探してくれたのと同じ友人だが、訪問の相手の印象は正反対だった。まず驚いたのは家に執事がいることで、真夏の台北で長衫を着て、震える手でお茶を運んできた老執事の存在に氣を取られて、その後、魯迅との論争など大陸時代のことを胡秋原に聞いたはずだが、内容はほとんど覚えていない。老執事の存在に驚いた理由は、戦後台湾で特権を享受している外省人の生活実態を見たからではなく、白先勇『台北人』シリーズの短編小説と変わらぬ世界が本当に存在していることを目の当たりにしたからだった。その時の会話で胡秋原が民族主義の立場から郷土文学に同情的な見解を述べたことだけは覚えているが、同じ外省人でも呉克剛と胡秋原では人生の歩み方も、戦後台湾における生き方も正反対であるように感じ、いつそう呉克剛への興味が募った。巴金や呉克剛がバリーで編集したサンフラン

シスコのアナキズム雑誌『平等』の中心人物 R. Jones (劉鐘時)<sup>(8)</sup>と共通する、理想主義への消えることのない情熱をそこに見ていたのかもしれない。呉克剛がかつての同志巴金と会いたいとの希望を度々漏らすので、一九八九年に巴金に連絡して帰郷を実現させたが、縁戚との軋轢や、直後に起きた天安門事件のため、失意のまま呉克剛は再び台湾へ戻り、一九九九年に亡くなった。八〇年代から九〇年代前半にかけて、私が数年おきに台湾を訪問する大きな理由は呉克剛に会うためで、この時期は台湾の文学研究者とほぼ接触がなかった。

初めての台湾訪問の時にもう一つ忘れられない体験があり、それが台湾文学に対する関心を強めた理由の一つでもある。八五年の旅では台湾を一周したが、南部から東部へ回るバスの車内で先住民の夫婦が日本語を話すのを聞いて非常に印象に残るなど、得がたい体験をいくつも重ねたが、中でも台東で先住民の知人が宿泊場所として手配してくれたのが、「老兵」すなわち外省人兵士の福祉施設である「榮民宿舍」だったことで、戦後台湾に生きる外省人のもう一つの姿を目撃する貴重な体験を得た。後にこの体験が動機の一つとなって、全八巻からなる「発見と冒険の中国文学」シリーズ(一九九〇〜一九九一年、JICC出版局)にどうしても台湾文学を一巻収録しようと思ったが、この時は「台湾文学」を中国文学のシリーズに収録することで、既成の中国文学概念を再検証する意味を込めていたものの、台湾文学に確たる見解を持っていたわけではなかった。まだ自覚的に台湾文学研究に足を踏み入れていなかった私は編集・監修の役に回り、翻訳は台湾文学研究の専門家に依頼したが、序文で「老兵」のことに触れて、「かつて台東郊外の退役軍人宿舎で見かけた老人たちの姿を思い出すと、私は今でも胸が痛くなる。黄昏時、老人たちは玄関先の石段に座り、ただ黙って夕闇迫る暮色を眺めていた。あれほど静かな悲しみをたたえた眼差しを私はそれまで見たことがなかった。彼らは闇の向こうの数千キロ離れた故郷を見つめていたのかもしれない」と書いた。<sup>(9)</sup>それは呉克剛や胡秋原のような知識人と異なり、下級兵士として戦後台湾を生きてきた外省人の望郷の思いが胸を打つ体験であった。

従ってこの段階で私の関心対象は、呉克剛を中心とする戦後渡台知識人や「老兵」たちの歴史認識や望郷意識が中心

で、民国期中国と戦後台湾を結ぶ回路から台湾文学を見ていたため、読む作品も必然的に白先勇のような大陸中国を意識する作家のものが中心だった。ただ戦後台湾で特権的外省人であることに無自覚な作家の作品は、たとえ文学史的に重要であっても読む気になれなかった。

## 二、日本語文学の道から——楊逵から呉濁流、張我軍へ

中国文学から台湾文学へ接近して行った段階で、戦前期台湾文学に関心がなかったわけではないが、研究対象とするところまで行かなかったのは、主として学習や知識の不足によって研究の水準まで辿り着けないことを自覚していたからだ。理由としてはそれよりも、どのような視点や理論で研究を進めるかが分からなかったことが大きい。言語的には、先住民の文芸伝統を除き、日本語か中国語で作品が読めるので、読解そのものに大きな問題はないが、批評・分析となるとそうは行かない。その大きな壁を乗り越える決意をした機会も実はまた偶然に訪れた。近代日本文学研究者の組織である昭和文学会の学会報編集者から、中国文学研究者の視点から旧植民地の文学について何か書いてほしいと依頼され、すぐに思いついたのは楊逵であった。実は楊逵の名前も巴金研究を通じて知っていた。巴金の南京・東南大学付属中学時代の上級生であった胡風が、巴金初期の作品『海底夢』を第三種人論争の中で批判的に論じていながら、三六年の国防文学論戦の時同じ陣営に属していた経緯を検証するため、胡風の著作を時系列的に調べてみると、楊逵の「新聞配達夫」を日本語から中国語に翻訳した事実を知ることになった。更に復旦大学時代に師事していた賈植芳先生が、胡風事件に巻き込まれて二五年間も政治的迫害を受けていたこともあって、研究指導を受けている時に度々胡風<sup>(10)</sup>のことが話題となつて、その著書や訳書を読むよう言われて、楊逵の「新聞配達夫」も最初は中国語で読んでいた。昭和文学会学会報編集者からの依頼を受けてすぐに思いついたのは、楊逵の小説を日本語で読んで考えてみようという計画だった。



昭和文学会に提出する小論「仮面の言語が照射するもの——楊達の日本語作品について」<sup>(12)</sup>を書き上げて、刊行された後、日本文学研究者及び旧植民地文学研究者との交流が始まるという大きな収穫があった。ただ論文の最後に「日帝統治が台湾の人々にとって最も苛酷であった時、戦時体制に押し流されていく日本のプロレタリア文学の作家に楊達は自分で育てた花を送って労った。その時少年が届けた花束は、楊達の日本の作家に対するいたわりと励ましのメタファーだったのだろう。ある意味では彼の日本語作品も同じであつたかもしれない。メッセージは常に台湾の側から送られていたのだ。当時の日本のプロレタリア文学の作家たちや戦後日本を生きた人々は、果たしてそのメッセージにきちんとした回答を送つたのだろうか。仮面の奥の瞳のまなざしを、そらさずにまっすぐ見つめ返したであろうか」<sup>(13)</sup>と書いただけで、当時はまだ研究不足のために更に深く文章化できないが、個人的にはどうしても違和感の残る問題が残つていた。それは楊達の「新聞配達夫」が入選作として発表された『文学評論』一九三四年一〇月号に掲載された、選考委員であるプロレタリア文学作家六名の作品評価であつた。予選段階から楊達「新聞配達夫」を推していた徳永直は「この小説は、決して上手でない。むしろまだ小説になつてゐないが、それにも拘らず、非常にひきつける力をもつてゐる。アメリカ資本主義が、インデアンを征服した当時の血なまぐさい匂ひがこゝでもハッキリわかる。しかし、この小説が大衆のものとなるには、もつとたかい意味での芸術化、形象化がなされなければならぬのではなからうか」<sup>(14)</sup>と書いている。同じく選考委員である藤森成吉、武田麟太郎、亀井勝一郎、窪川稲子、中條百合子らの評価も、表現の違いこそあれ、植民地の日本語作家を、真情、素直、直情、ひたむきという素朴イメージから評価し、その裏返しとして幼稚、未熟、不足という未成熟イメージから批判している点は共通していた。徳永直のように植民地の日本語作家を積極的に日本文壇に紹介・評価すること自体は、恐らく主観的には善意と同情心に満ちていて、楊達のような日本文学を評価する主体が日本の作家で、間を提供したという点で意味のあることだったのかもしれないが、植民地の日本語文学を評価する主体が日本の作家で、評価される客体が植民地の日本語作家である構図ははつきりしている。ファシズムが進行する当時の日本の社会状況か



ら考えれば、植民地の日本語文学を「発見」することは、日本のプロレタリア文学作家にとって良心の証であったかもしれないが、弾圧によりプロレタリア文学運動が崩壊した後の左翼作家にとって、労働者・農民に代わる同情対象が植民地の日本語作家であったのではないかという疑問が脳裏から去らなかつた。

そこでこの問題を少し広い視点から考えるため、同じく日帝の植民地であつた朝鮮の日本語作家で、楊達とほぼ同時に日本文壇に紹介された張赫宙と一緒に取り上げて論じることにして、「想像／創造される植民地——楊達と張赫宙」を書くことにした。題名から想像がつくように、この文章は日本のプロレタリア文学者の植民地想像が、エキゾチズムと結びついた植民地形象創造に繋がっていたという仮説に基づいたものである。同文の内容の一部を二〇〇五年四月、アメリカ・シカゴで開かれたAASで発表したところ、「親日作家」・「皇民文学作家」張赫宙を取り上げたとして韓国人留学生から厳しく批判される事態を招いたが、その経験は旧植民地の日本語文学を研究するにあたって必然的に直面せざるを得ない政治的文脈への対応や、自らの植民地研究や歴史研究の不足を意識する機会となった。ただ自分の研究に対するそうした批判発言の理由は理解できても、日本国籍を持つ者として、韓国人留学生と同じ立場で張赫宙を「皇民文学作家」として指弾する立場には立てなかつた。とりわけ旧植民地の人々が帝国日本の歴史をきちんと総括しない戦後日本社会を告発・批判する時、そうした批判に表面上同調することで自分の責任を免罪していく言説を、私個人は到底受け入れ難かつた。「日本社会に生きる者も自分の歴史記憶に向き合うべきであるにもかかわらず、自らが傷つけ抑圧した他者の記憶を利用して、自分自身の姿を見ることが逃けている」<sup>(15)</sup> 少なからぬ人々が、左右の政治的立場に関係なく日本社会に存在していると考えるからである。植民地の日本語作家が「日本語作品を創作する場合、宗主国の言語を模倣することによって受容せざるを得ないが、逆に受容の過程で自分の日本語を創作するのだから実には日本語作品とはならない」<sup>(17)</sup> 状況の下で文学作品を書いたのなら、その新しく生成された日本語を評価すべきだと言うのが私の立場であつた。そうすると、台湾の日本語文化を単に帝国の負の遺産としてではなく、帝国に強制された状況下で植民

地の人々が、苦しみと共に主体的に創造した近代の一部として考える立場があり得るように思えた。その場合、日帝植民地統治時代に中国人意識を鮮明に持ちながら、戦後国民党支配下にあつては日本語文化を抵抗武器の一つとした呉濁流のことが気になった。

呉濁流のことを書くにあたつて資料収集から開始したが、思いがけなく大学時代の恩師である飯倉照平先生から、雑誌『中国』編集時代に使用した呉濁流資料を箱ごと頂き、中に呉濁流から贈られた書まで入つていて感激したが、高校時代に読んだ雑誌『中国』第六五―六九号（一九六九年四月―八月）掲載の呉濁流「無花果」が、実は飯倉先生が編集したものであることを知つて不思議な縁に驚いたことを覚えている。ただこの時、呉濁流について書いてみようと思つた主たる動機は、実は高校時代の読書体験からではなく、黎烈文が副社長を務めていた『台湾新生報』の記者だった呉濁流が、戦後祖国復帰した時に国語転換に対して取つた態度に興味を引かれたためであつた。一九〇〇年生れの呉濁流は書房教育を受けた後に公学校に入学したので、その時点で一回言語転換を経験しているが、戦後更に日本語から中国語への国語転換を経験している。呉濁流は『台湾新生報』で中国語を日本語に翻訳する仕事に携わつたが、中国語版の編集は外省人が、日本語版の編集は本省人が行つたため、「おなじ一つの新聞社であるのに、いつのまにか自然に二派に分かれてしまつた」<sup>(18)</sup>と回想している。更に一九四六年一〇月二五日から台湾全島ですべての定期刊行物における日本語版が廃止されることになり、退社にあたつて呉濁流は「最後の言葉」を残し、「台湾は五十年間淪落した、其淪落の苦しみをもつとも直接的に体験してゐるのが本省人である、本省人は国家を愛するから不正を憎悪する。貪官汚吏を憎む余り、外省人さへ憎むやうになつた。この現象はもつとも悲しむべき現象である。当然手に手をとつて新台湾建設に邁進すべきであるが、外省人も本省人もそれを忘れて徒に罵り合ひ、競つて悪口を云ひ合ふ愚を敢てしてゐる」<sup>(19)</sup>と戦後台湾を支配する国民党政治への批判や、省籍矛盾を嘆く言葉を連ねている。こうした事態の中で、同時期に書いた「日文廃止に対する管見」では、「日文新聞や日文雑誌は過渡期と云はず永久に自由に発刊を許すべきものであると思ふ」<sup>(20)</sup>と

日本語文化を擁護している。こうした呉濁流の戦後初期の日本語文化に対する立場を調べてみると、「支配者の言語を使用して被支配者が自己表現したり、他者理解や世界理解の手段としなければならない、植民地主義が生成する逆説構造は、それ自体として被支配者に苦痛と困難をもたらすが、台湾の人々はそこからさらに戦後もう一つの国語＝中国語を、専制政治とともに受容しなければならない苦難の道を歩まなければならない」<sup>(21)</sup> 構図が見えてきた。

こうして楊達から呉濁流へ進んで、戦前・戦後の台湾文学を通時的に考える視点を設定した後は、さらにこれを台湾だけでなく旧植民地・旧占領地の日本語文学へと視野を広げて考えることで、日本語文学の持つ共時的な問題へと思考を展開させる必要を感じた。「植民地・占領地の日本語文学——台湾・満洲・中国の二重言語作家」<sup>(22)</sup>で、台湾・朝鮮・満洲以外に、日本軍に占領された中国各地・南洋諸島・サハリン・南方アジアの日本語文化まで視野に入れようとしたのはそのためである。同文では「国語と日本語の概念的境界線は、帝国日本の海外侵略に伴って植民地内で日本語が国語化の過程を歩むことで、対内・対外的呼称の境界設定が可変的かつ流動的になり、概念上の越境問題を抱え込むが、同時に帝国日本の国家領域の外側に軍事支配地域を持つ場合、対外的呼称としての日本語を諸国家間の共通語として普及しなければならぬため、逆に言語概念を対外的に固定せざるをえず、概念上の越境が不可能になるという自己撞着に陥る」<sup>(23)</sup>ことを前提として、植民地・占領地で生成される日本語文化が現地社会の歴史・政治的条件により相互に異なること認識するべきだけでなく、当然ながら帝国日本の近代史そのものと関連させながら考察するべきことを意識するようになった。この問題を具体的に考えるには、例えば一九四二—四四年連続三回開かれた大東亜文学者大会に参加した台湾出身の作家が、日本や日本語にどのような態度や見解を示すのかを調べる必要があると考えた。特に関心を持ったのは第一回大会から中華民国代表として参加した張我軍だった。

一九二〇年代半ば、中国語による台湾新文学運動の啓蒙期に活躍し、その後大陸に渡った張我軍は、二六年に北京で魯迅に面会して植民地台湾に生きる苦悩を訴え、<sup>(24)</sup>やがて二九年に北京師範大学を卒業後、母校の他、北京大学や中国大

学で日本語教師を務め、日本語学及び日本文学研究者としての地位を固めて、三七年北京が日本軍に占領された後は、創設された「北京大学」で日本語及び日本文学を講じる教授となった。日帝の植民地支配に反発し、中国人意識を鮮明に持ち、植民地台湾を脱出して大陸中国に渡って中国人として生きることを選択したが、逆に大東亜共栄圏では、植民地台湾出身者であるために日本語能力が高く、高等教育機関で日本文学を教授するほど日本理解の深い中国人として、帝国日本に利用される運命に陥る台湾出身の作家にとって、日本語とはどのような意味を持った言語なのかを解明したいという気持ちに駆られたのである。「植民地・占領地の日本語文学——台湾・満洲・中国の二重言語作家」では、張我軍研究の入り口に辿り着いただけだが、「その日本語能力にも関わらず、日本語で文学創作を行わず、研究者・翻訳者として日本文学をあくまでも対象として考えるという姿勢で、韜晦に似た迂回路で二重言語者としての主体性を確保する方法を選択したと推測する」ことはできても、「日本語を手段として思考体系や主体と切り離して外在化すること、<sup>(25)</sup>でしか自らの文学的主体を確保できないという、袋小路のような隘路に植民地出身の作家を追い込んでいった原因は、帝国日本の支配政治であり、言語政策であり、文学制度である。帝国日本が台湾に持ち込んだ日本語は、植民地出身者に生涯消えることのないステイグマを押したも同然であり、彼らのアイデンティティにどこまでも深い傷を負わせる言語であった」<sup>(26)</sup>と考えると、もはや国語・日本語の越境問題のような近代国家の言語政策や文学制度のみで台湾作家を論じることには限界があり、作品を通して作家の思惟にどのように踏み込んでいくか、次の方法論を考えざるを得なくなった。

「植民地・占領地の日本語文学——台湾・満洲・中国の二重言語作家」を書いた時点で、ヒントの一つは同じ日帝支配を受けた地域の作家の個別研究を増やすことだと思ひ、満洲国となった東北出身の作家梅娘について書く<sup>(27)</sup>と考えた。奇縁と言すべきか、実は友人である北京在住の作家史鉄生を通して、以前から梅娘の存在は知っていた。正確に言えば作家梅娘を知っていたのではなく、私が史鉄生に送る日本語文章を翻訳してくれる孫家瑞という老婦人の存在を知って

ただけだが、後に史鉄生からその人が作家梅娘であることを聞き、日本でも彼女の短編小説の翻訳が出たこともあって、張我軍のことを考える際に参照してみようと思い立った。梅娘は短編集『蟹』が第二回大東亜文学賞を受賞していることから分かるように、日本軍占領下の中国の女性作家として、日本側の宣伝材料にされたが、「日本語文化全体を拒絶せず、日本文学翻訳を通じて女性問題への関心を表現する」<sup>(29)</sup>ことで主体性を保持しようとした節が窺える。だが「梅娘の文学的主体もまた満洲国や日本占領下華北の社会的、時代的制約の下で限界性を持ち、個人の文学活動を規制する政治的強制力やそれを支えるイデオロギーと無縁に生きることではできなかった」、「この点は母語である中国語と世界認識の手段としての日本語を使い分けることで、自らの文学的主体を確保する意図を持つように見える張我軍が、帝国日本の大東亜共栄圏に飲み込まれていく構図に似ている」<sup>(30)</sup>点を指摘したに留まって、本格的な研究は今後に待つという状態である。従って私にとって日本語文学研究は、足を踏み入れては見たものの、まだ多くの課題や作業が残っている領域として現前している。

### 三、台湾モダニズムから漢語文学へ——白先勇と想像のネイション

楊逵から呉濁流や張我軍へと進んだことで、戦前から戦後へと台湾文学の一つの全体として見る視点が広がったが、戦後台湾文学について考えると、国語が中国語に転換したため、今度は大陸中国と台湾という二つの軸を中心として、まずその連続・非連続及び主体性問題を通時的・共時的に考察する必要があるが生じた。その場合、戦後台湾文学における主体概念を設定するからには、最初に台湾における文学主体の輪郭を定めなければならないので、以前中国現代文学の分野で郷土文学について小論を書いたこと<sup>(31)</sup>もあり、まずネイティヴィズムの視点から台湾の郷土文学の作品を読み進めることにした。「新しい台湾の文学」シリーズで『鹿港からきた男』<sup>(32)</sup>を編集したのがその学習成果の一つで、「郷土文学は、想像された民衆イメージに根拠を置いているという共通項はあるが、初期にはかなり多様な側面を持っていたのに対し

て、一九七七年に始まる郷土文学論戦が、それに関係した作家の明確な立場表明を促したために、固定した郷土文学理解が広がる結果となった<sup>(33)</sup>と考へ、郷土文学を本質主義的に考へるのではなく、ネイティヴィズムやナショナリズムの文脈に置いて考察する方向へと向かった。当初は便宜的にネイティヴィズムを小さなナショナリズムと仮定して戦後台湾文学における郷土概念を検証しようとしたが、個人の視点から見ればネイティヴィズムは自己回復の運動でもあるので、個人のアイデンティティとナショナリズムをどう考へるかが鍵であるように思えた。そこでアイデンティティとネイションへの帰属問題を考へるのに最適な作家として白先勇を取り上げることにした。白先勇や朱天文や張大春らの小説を収録した『台北ストーリー』では「先行植民グループ（本省人）と後発植民グループ（外省人）」という歴史的要因や、民間権力（本省人）と国民党権力（外省人）という権力図式や、台湾意識（本省人）と中国意識（外省人）というナショナリズム対立が、必ずしもそれぞれ垂直に、あるいは水平に対応するわけでなく、時としてタペストリーの色模様のように社会内の多様性であったり、またそれぞれのグループ間の上下関係がそのまま経済格差に結びついているわけではない<sup>(34)</sup>。都市空間台北を舞台として、都市文学の観点から白先勇の小説を考へてみた。ただこの視点からだけでは六〇年代モダニズムを解説することができないことは歴然としていた。

以前から白先勇の小説はその甘美な喪失感に惹かれてよく読んでいた。八五年夏の胡秋原の邸宅での体験は、白先勇の小説に外国人には実感できない現実的なリアリティがあることを知らせてくれた点で意味があったが、私個人も上海で二年間の生活経験があったので、白先勇の小説にダンスホール「白楽門（パラマウント）」などと上海に実在する固有名詞が出てくると、自分の人生のノスタルジアが小説中の登場人物や作家の民国期へのノスタルジアと重なって、いつそう興味を掻き立てられるという側面もあった。ただ研究対象として考へる場合に関心を持ったのは、モダニズム実践の部分であった。

白先勇は従来から一九六〇年代モダニズムが郷土文学と対立するものではないと述べていたが、それ故にいつそうモ



ダニズムとは何かを説明する必要性を自分でも感じていた。二〇〇〇年に来日した時のインタビューで白先勇は「六〇年代台湾の新しい文学は五四運動に続く、近代中国文学史上二回目のモダニズム運動だった」、「五四文学とも、三〇年代中国文学とも、あるいはそれまでの台湾文学とも違う、新しい文学だった」<sup>(35)</sup>と答え、まず大きな枠組みとして、魯迅や巴金のような中国現代文学と台湾文学を連続させて考え、台湾を大陸と異なるもう一つの中国と見なしながらも、同時に従来の台湾文学の潮流を意識した立場を表明している。この点に注目してモダニズムの問題を考えたので、二〇〇一年自分で企画した国際交流基金アジアセンター・アジア理解講座「台湾文学を味わう」でも、白先勇とモダニズムについてこの視点から論じ、翌年この講座全体の内容を単行本化して発表した際も、「『現代文学』を中心とする六〇年代モダニズム文学は、アバンギャルド的前衛運動ではなく、台湾の政治的・社会的コンテクストの中で、モダニズム実験の形をとった、大陸中国とは異なる正統的な近代文学運動だった」<sup>(36)</sup>と位置付けた。但しこの段階では「台湾の政治的・社会的コンテクスト」について十分な理解があったわけではない。とりわけ戦後台湾におけるネーション想像にどのような視点から切り込むか、なかなか糸口が掴めなかった。

白先勇と同様に大陸で生まれ、戦後台湾で育った外省人で、アメリカで大学教員として生活するという共通点を持つ作家張系国を参照例として比較してみようと思ったのは、その糸口を探るためだった。台湾に生きる中国人であるという「台湾意識」を持つ点で白先勇と張系国は似ているように見えるが、張系国の『星雲組曲』を訳してみても、「彼の民族意識は、台湾が中国の一部として存在しているというだけでなく、台湾社会が大陸社会と異なる独自性を持つが故にまた中国社会的特徴の一部を形成するという中華民族意識として捉えるべき」<sup>(37)</sup>であるように思い、中華民族意識を持つが故に減じていく人々のレクイエムを描く白先勇と異なるネーション想像をしているように感じた。この点に関して張系国はむしろ、「白先勇の作品が感性的、回顧的、絶望的だとすれば、張系国の作品は知性的、展望的、希望的である」<sup>(38)</sup>と両者を比較した詩人余光中に似ている。「共同体とは現実に存在する国家としての中国である必要はなく、また

もう一つの中国としての台湾である必要はない。ナショナリズムが国民国家生成のイデオロギーであると同時に、華人社会においては、外側のナショナリズムとして機能することを考えれば、ハナ・アーレントが「少数民族のネイション」(「国民国家の没落と人権の終焉」)と名付けた国境を超える少数民族のネットワークにも多少似て、華人ネットワークを通じて形成されるネイションは、台湾で人口的に少数派でありながらも権力的に多数派であった外省人を、大陸中国をも包摂する中華文明ネイションへ精神的に統合させる契機になり得る」(39)との余光中を評した自分の言葉は、張系国に対してもほぼ当てはまると考えた。

これを参照例とすると、白先勇の文学に特徴的なのは、ネイション想像から零れ落ちるディアスポラやエグザイルの人々の悲しみではないかと考えられ、彼が六〇年代モダニズムとして創造しようとしたのが、歴史と向き合う個人の主体性ではなかったかと考えるようになった。一九六〇年代台湾モダニズム文学の特徴とは、国民党による言論統制の下で、五四新文学や日本統治期台湾文学を継承する道を閉ざされていた若い世代が、閉塞状況の中で、中国古典の近代的解釈を實踐し、近代を想像する参照例として西洋文学を受容して、自分たちのアイデンティティ・クライシスを起点に作品創作を實踐した<sup>(40)</sup>という白先勇の小説及びモダニズムについての従来の見解に変化はないが、更に一歩進んで「一九六〇年代台湾モダニズム文学は、社会的、歴史的条件を引き受けて、文学において戦後台湾の近代性を想像／創造しようとする言説の形であった」、<sup>(41)</sup>「書くことの主体性をまず獲得するという意味で、文学の近代性実現のための実験であった」と戦後台湾文学の独自の文脈に白先勇の小説を置いて考えるようになった。特に今年訳出した『台北人』に関しては、「台北という場所に生きるエグザイルを描いたという点から言えば、『台北人』は戦後台湾社会という場所や一九六〇年代という時間がなければ描き得なかった小説として、『台北人』と名付けられる必然性があった」、「民国史から台湾史までを大きな物語の枠の中に組み入れている点で、正にその歴史性そのものを引き受けている小説としてモダニズムの小説と呼ぶのに相応しい」<sup>(42)</sup>と戦後台湾社会のモダニティ創造の観点から白先勇の小説を分析するようになった

た。白先勇の作品は中華民國と戦後台湾の歴史を通時的に描いているように見えながら、歴史の有為転変がもたらす時間と空間の喪失によって、そこに大きな断絶が存在することを結果的に表現することになり、ネイションがいつそう遙か彼方に遠ざかり、それ故にまた儚いノスタルジアが増大する構図が見えてくるのである。

この視点に基づけば、実は戦後台湾文学を見る時に、中華文明ネイションの虚実よりも、むしろそれを意識する個人のアイデンティティの方がより重要な要素となる。その場合、言語は個人を共同体へ統合する国語や民族言語としてよりも、世界と自分を繋ぎ、世界に対して自己表現するアイデンティティの符号として機能することに留意せざるを得ないように感じて、白先勇の小説を中国文学や台湾文学という枠組みから解放して、中文小説・漢語小説として批評できないかと考え始めた。ちょうど一九八〇年代から、言語や文学が越境する状態を分析する方法論として「華文文学」なる用語が登場し始めた。だがこれは中華人民共和国以外の地域、つまり域外で生成される漢語文学を、中国という中心から見た外部ナショナリズムの別形態であるように思えた。私個人は所謂中国文学も、中国国内の非漢族作家の漢語文学も、諸外国の漢語文学もすべて含んだ概念としてならば、華文文学という批評用語を設定することで、作品の解説がより豊かになるのではないかという期待があった。そのため華文文学だけでなく華人文学も一度考えて見る必要があると思い、アメリカの華人作家を取り上げた「華人文学」におけるジェンダーとナショナリズム<sup>(43)</sup>のような文章を書いたり、南アジアにおける華人の歴史に興味を持って、秘密のベールに包まれていたマレーシア共産党関係者の聞き書き集を出版したシンガポールの友人のために、序文「記憶與言語 Chronology」<sup>(44)</sup>を書いたりした。

ところが何回かこの見解を国外の討論会で発表したところ、一部の中国人研究者から国家分裂を助長する言論として批判され、結局のところ華文文学は「中国内部の多様性を切り捨てて、外側の空間からみるという構図で中国の輪郭を浮かび上がらせる、エスノセントリズム」<sup>(45)</sup>の発想ではないかと思ひ、台湾文学を研究する際に生産的議論に結び付きそうにないので、代わりに漢語文学を考える新たな批評用語として、親しい台湾文学研究者から学んだ「マイナー文学」

という言葉を使用するようになった。マイナー文学 Minor Literature とは、カフカの文学を念頭にジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが考え出した概念で、マイノリティがマジョリティの言語によつて創作する文学を指すが、特徴として言語の非領域化、文学の政治性、集団性が挙げられている。中国文学や台湾文学の本質主義的な一元化への批判的立場を確保できるのではないかと考えたのが最初だが、構想としては、マイナー文学という視点でチベット作家ザシダワやアーライやエヴェンキ作家ウロルトを、リカラツ・アッウーのような台湾先住民作家と同時に論じ、一方漢語文学という視点で、マレーシア出身の台湾在住作家黄錦樹や台湾出身だが香港を舞台にした作品を発表している施叔青などを論じること、政治地図から自立した中国文学・台湾文学研究の新たな理論や方法を探求することが当面の目標である。一つの中国文学や台湾文学でなく、千の中国文学、万の台湾文学を読み解きたいという希望をそこに込めている。

自分の台湾文学研究の現地点を見れば、まだ長い歷程のほんの短い距離を歩いたにすぎないことが自覚できる。過去を振り返れば、読み解き明かしたい願望に突き動かされて、迷いと挫折を繰り返しながら考え、文章を書き、翻訳を行ってきた自分の残像が見えるが、今後を展望しても、恐らく同じ歩みを繰り返していくだろうという漠然とした予測がある。それは台湾文学の豊穡な世界に魅せられた者として当然の足取りであり、常に途上にいる自分を意識することで前へ進むことができるのだと考えている。

(本稿は二〇〇七年七月五日東京大学で行われた「東京大学文学部中国文学研究室・台湾大学台湾文学研究所合同ゼミ」における講演内容に基づく)

# 注

- (1) 山口守「越境する文学と言語——中国文学・台湾文学・日本文学」、『日本台湾学会報』第一号(日本台湾学会、一九九九年五月)参照。

- (2) 吳克剛(一九〇三—一九九)、安徽省寿州生まれ。上海の中国公学在学中に朱自清、沈仲九の教えを受ける。卒業後、一九二一—二三年胡愈之の紹介でエロシエンコの通訳となり、北京へ移って魯迅・周作人邸に住み込む。エロシエンコ帰国後は上海でのアナーキズム活動を経てフランスへ留学。パリで巴金と同居。アナーキズム・インターナショナルの書記として活動。パリ時代の吳克剛の悲恋を題材に巴金は短編小説「亜麗安娜」及び散文「亜麗安娜・渥柏爾格」を書く。巴金と相前後して帰国してからもアナーキズム運動を継続。泉州の黎明中学校長なども務めるが、運動が崩壊状態になると国民党関係の職務に就き、抗戦中は資源委員会や『掃蕩報』の幹部となる。戦後、行政長官公署参議として台湾接収のために渡台。台湾大学経済系主任、台湾省立図書館館長などを務めた後、定年まで中興大学経済系で教鞭を執る。巴金と吳克剛については拙文「去り行く世紀の記憶——巴金と友人たち」(『ユリイカ』一九九九年一月号)、「巴金とエマ・ゴールドマン(二)・(三)」(『トスキナア』五号・七号、トスキナアの会、二〇〇七、二〇〇八)、及び「中国アナーキズムにおける求心力と遠心力」(『孫文と華僑』汲古書院、一九九九年)参照。
- (3) 初出は香港『大公報』一九八〇年五月三十一日—六月二日
- (4) 白先勇『現代文学』的回顧與前瞻、ここでは『第六只手指』(爾雅出版社、一九九五年)二四三頁より引用
- (5) 巴金『友人劍波和他的小説『心字』』、『台湾新生報』一九四六年八月九日
- (6) 張明『在台湾的作家』、『台湾新生報』一九四八年二月一三日
- (7) 吳克剛『吳克剛先生紀念文集』(未刊)、一九八九年定稿、七一頁。なおこれとは別に公開された自伝『一個合作主義者見聞録』(中国合作学社、台北、一九九九年)があるが、内容は未公開自伝の方が詳しい。
- (8) R. Jones の生涯について Paul Avrich, *Anarchist Voices*, Princeton University Press, 1995, p. 167, pp. 409-410 に詳し。
- (9) 山口守『バナナボートの乗船券』、『バナナボート——台湾文学への招待』、JICC出版局、一九九一年、四頁
- (10) 賈植芳(一九一六—二〇〇八)、山西省襄汾侯村生まれ。一九三二年北京のミッションスクール崇実中学に学び、三六年日本に留学、日本大学で社会学を学ぶ。三七年日中戦争勃発と共に帰国、抗日宣伝活動に従事。「七月派」の中心的な作家として活躍。五〇年震旦大学中文系主任に就任、五二年復旦大学中文系に移る。五五年胡風事件により逮捕投獄、八〇年に名誉回復。
- 『賈植芳文集』全四卷(上海社会科学出版社、二〇〇四年)など編著書多数。
- (11) 胡風訳の楊達「送報佚」は、『世界知識』第二卷第六号(一九三六年六月)、『山靈』(文化生活出版社、一九三六年四月)、

『弱小民族小説選』（生活書店、一九三六年五月）と三回発表されているが、当時自分がどの版で読んだかは記憶が定かでない。

- (12) 山口守「仮面の言語が照射するもの——楊達の日本語作品について」、『昭和文学研究』第二五集、昭和文学会、一九九二年九月

- (13) 同前、一四一頁

- (14) 「入選小説『新聞配達夫』について」、『文学評論』第一卷第八号、一九三四年一〇月

- (15) 山口守「想像／創造される植民地——楊達と張赫宙、吳密察・黄英哲・垂水千恵編『記憶する台湾』東大出版会、二〇〇五年

- (16) 山口守「記憶への旅・（一）台湾」、『リベラシオン』第二二七号、福岡県人権研究所、二〇〇七年九月、一一一頁

- (17) 前掲「想像／創造される植民地——楊達と張赫宙」、九七頁

- (18) 吳濁流『無花果』前衛出版社、一九九三年、一七七頁。日本では雑誌『中国』一九六九年七月号が初出。

- (19) 吳濁流「最後の言葉」、『台湾新生報』一九四六年一〇月二二日

- (20) 吳濁流「日文廃止に対する管見」、『新新』第七号、一九四六年、一二頁

- (21) 山口守「吳濁流と国語問題」、山田敏三編『境外の文化——環太平洋圏の華人文学』、汲古書院、二〇〇四年、五二六頁

- (22) 山口守「植民地・占領地の日本語文学——台湾・満洲・中国の二重言語作家」、『帝国』日本の学知』第五卷、岩波書店、

二〇〇六年

- (23) 同前、一一頁

- (24) 鲁迅「寫在『労働問題』之前」（『而已集』）に面会の様子が記されている。

- (25) 前掲「植民地・占領地の日本語文学——台湾・満洲・中国の二重言語作家」、四三頁

- (26) 同前、四四—四五頁

- (27) 史鉄生「孫姨和梅娘」（『記憶與印象』北京出版社、二〇〇四年）に彼と梅娘の出会いの経緯が書かれている

- (28) 梅娘著、尾崎文昭訳「異郷の人」、『中国現代文学珠玉選・小説三』（二玄社、二〇〇一年）所収

- (29) 前掲「植民地・占領地の日本語文学——台湾・満洲・中国の二重言語作家」、四八頁



- (30) 同前、四九頁
- (31) 山口守「劉紹棠と魯迅——『郷土文学』論における断絶」、『猫頭鷹』第二号、「新青年」読書会、一九八三年二月
- (32) 黄春明・王拓・宋沢業・王禎和著、池上貞子・垂水千恵、三木直大、山口守訳『鹿港からきた男』、国書刊行会、二〇〇一年
- (33) 山口守「郷土文学から台湾文学へ」、同前書、三五三頁
- (34) 山口守「編者あとがき」、白先勇・張系国・黄凡・朱天文・張大春・朱天心著、山口守・池上貞子・三木直大・渡辺浩平訳『台北ストーリー』、国書刊行会、一九九九年、二九六―二九七頁
- (35) 山口守「白先勇氏インタビュー」、『ユリイカ』二〇〇〇年八月号、青土社、二五六―二五七頁
- (36) 山口守「白先勇と六〇年代モダニズム」、『講座台湾文学』、国書刊行会、二〇〇三年、一八八頁
- (37) 山口守「訳者あとがき」、張系国著、山口守訳『星雲組曲』、国書刊行会、二〇〇七年、三〇二頁
- (38) 余光中「天機欲覲話棋王」、『棋王』、洪範書店、一九七八年、二頁
- (39) 山口守「記憶のノスタルジア」、『現代詩手帖』二〇〇六年八月号、六一頁
- (40) 山口守「解説」、白先勇著、山口守訳『台北人』、国書刊行会、二〇〇八年、二六五頁
- (41) 同前、同頁
- (42) 同前、二七一―二七二頁
- (43) 山口守「『華人文学』におけるジェンダーとナシヨナリズム」、『アジア遊学』第四三号、勉誠出版、二〇〇二年九月
- (44) 山口守「記憶與言語 Chronology」、邱依虹「生命如河流——新、馬、泰一六位女性的生命故事」、策略諮詢研究中心、Kuala Lumpur, Malaysia、二〇〇四年、巨流圖書公司、台北、二〇〇六年
- (45) 山口守「夜の対話からマイナー文学まで——史鉄生・ザシダワ・アーライ」、『規範からの離脱』、山川出版社、二〇〇六年、一六八頁